

地域に居場所をもつことが 社会を豊かにする

2021年
新春対談

作家 奥泉光さん × 河村孝市長

市内在住の小説家・奥泉光さんは、芥川賞をはじめ数々の文学賞を受賞された、日本を代表する作家の一人です。一方で、多忙な執筆活動の傍ら、おおさわ学園のコミュニティ・スクール委員を務めるなど、地域活動にも熱心に取り組み続けてきました。奥泉さんの作品を愛読する河村孝市長が、作品執筆の秘密や文学の醍醐味、さらには小説の楽しみ方などをお聞きするとともに、地域活動との関わり方について語り合いました。



河村 孝市長

Takashi Kawamura

1954年、静岡市生まれ、66歳。1977年、早稲田大学卒業後、三鷹市に就職。企画部長として、都立井の頭恩賜公園への三鷹の森ジブリ美術館の誘致を実現。2003年から3期12年にわたり助役・副市長として市政を支える。働きづくり三鷹代表取締役会長、(公財)三鷹市芸術文化振興財団理事長、(公財)三鷹国際交流協会理事長などを歴任し、2019年4月に第7代三鷹市長に就任(現在1期目)。好きな言葉は「持続する志」。趣味は読書と散歩で、読書の好みは純文学から漫画まで幅広い。早稲田大学在学中に始めた空手は黒帯。

登場人物が動きだす感触が小説を面白くする

河村 奥泉先生は、三鷹市に住んでどれくらいですか。

奥泉 今の家に住み始めて約20年ですが、国際基督教大学に入学して、ICU(在学中にも住んでいた)で、そこからだとずいぶん長くなりますね。

河村 ICUはアメリカの大学のような雰囲気です。私が学生時代を過ごした大学とはだいぶ違う雰囲気になりました。実は、三鷹市の職員になってからICUに通っていたことがあるんです。

奥泉 勉強をしていたんですか。

河村 三鷹市とICUで共同研究をしていて、毎日研究室に通っていました。その際、大学時代をICUで過ごしていたら、別の人生を歩んでいたかもしれないところ、先生が小説家になったきっかけは何だったんですか。

奥泉 大学で社会科学を専攻して、学者になることを志していたのですが、大学院の頃、後に「古代ユダヤ社会史」として出版される本の翻訳を仲間と手掛けました。原文はドイツ語で、パソコンがない時代にすべて手書きの翻訳が本当にしんどくて、疲弊してしまっただけです。しばらく学術的なことはやりたくないと思ったわけです。そこから小説の道に。

河村 そのような自由なジャンルがある、何を書いてもいいと聞いて、ちょっと書いてみようと思って。

奥泉 最初の作品は、「地の鳥天の魚群」ですね。初作品であそこまで書けるのは、



長く付き合える本との出会いは人生の宝になる

河村 今年はどんな活動を予定されているのですか。

奥泉 現在、文芸誌『虚史のリズム』という作品を連載しています。終戦2年後の、1947年を舞台にした小説です。アジア太平洋戦争から占領時代にかけての物語で、戦後思想の成り立ちをテーマにしています。非常に混沌とした時代で、日本の歴史でも分らないことが多いのですが、最近ではアメリカの史料が公開され始めています。

河村 面白そうですね。

奥泉 連載は今年いっぱいには続き、これまで書いてきた中でも最も長い作品になると思います。今は、その執筆に一番力を入れています。

河村 大作ですね。楽しみですが、文学の楽しみ方について、先生からのアドバイスをいただけないですか。

奥泉 そうですね。特に文学好きというわけではない方は、小説は最初から最後まで読まなくてはいけないものだと思うな、読んでほしいと思います。

河村 どういうことでしょうか。

奥泉 先ほど、小説は「語り」のお話を書きました。語りには魅力がある小説は、どこか読んでも面白いものなんです。だから、最初から最後まで読み通すことを目標にするのではなく、ある本と時間をかけて「付き合っていく」と考えたらよいのではないのでしょうか。音楽でも好きな曲は何度も聴くように、小説と付き合っていくべきです。そして、なるべくゆっくりと深く読む。それができる本との出会いは人生の宝になります。

河村 私は、本との出会いは一期一会だと思つているところがあって、何度も読む本はそう多くありません。だから、繰り返して読みたい先生の本は私にとって大切な宝です。今日は本当に勉強になりました。ありがとうございます。

奥泉 こちらこそ、ありがとうございます。

学校は働き盛り世代が地域社会に関わる貴重な場

河村 先生は、2009年におおさわ学園の「おやじの会」を設立し、初代会長を務められました。作家である先生が学校活動の支援に参加されたのは、どんなお気持ちからだったのですか。

奥泉 子どもが大沢台小学校に入学して、後に小・中一貫のおおさわ学園になりました。その際にクラス運営委員を引き受けましたが、学校に関わることをやってみたくて思っただけです。その経験が実に面白かった。それで周りの人にも「やってみたい方がいいよ」と勧められています。学校を拠点に、地域に住む人々が交流することは本当に重要だと思います。



奥泉 光さん

Hikaru Okuzumi

1956年生まれ。国際基督教大学修士課程修了。1986年、『地の鳥 天の魚群』で小説家デビュー。1994年『石の来歴』で芥川賞受賞。その後『神器』『東京自叙伝』『雪の階』などで数々の文学賞を受賞。作風はミステリー構造をもつものが多く、虚実のはざまに読者を落とし込む手法を得意とする。2020年には自身が熱心なファンである将棋をテーマに『死神の棋譜』を上梓。芥川賞をはじめ数多くの文学賞の選考委員を務め、2016年から三鷹市と筑摩書房が共同主催する太宰治賞の選考委員にも就任。近畿大学文学部教授。



奥泉光さんの主な作品。手前から時計回りに『死神の棋譜』、『吾輩は猫である殺人事件』、『ノヴァーリスの引用』(野間文芸新人賞)、『東京自叙伝』(谷崎潤一郎賞)、『雪の階』(毎日出版文化賞・柴田錬三郎賞)。

河村 市の教育長が聞いたら、泣いて喜びます(笑)。

奥泉 子どもには学校があり、高齢者にも交流の場があります。でも、働き盛りの人々が地域で交流する場はあまりないんです。こうした中で、地域の大人が参加できる場の一つが学校です。僕はそういう形での社会参加は必要なことだし、さまざまな人と交流するチャンスがあることは、人生を豊かにすると思うんです。

河村 先生の地域へのまなざしは小説にも表れていて、作品にもさらりと「コミュニティ・センター」の描写が出てきたりしますね。

奥泉 はい。東京では地域社会に参加しな

親や教員以外の大人が学校にいることの重要性

奥泉 子どもが学校を卒業してからも、おおさわ学園のコミュニティ・スクール委員を10年間やってきて思うのは、「地域のために何かしたい」という思いのある人はたくさんいるし、潜在的にすごい力量を持った有能な人たちもたくさんいるという

河村 三鷹市は古くからコミュニティ行政を推進してきたという歴史があって、七つの住区にコミュニティ・センターがあります。社会が多様化する中で、都会と田舎の良さを併せ持つ三鷹の地域の在り方は、これから一層、問われてくるのではないかと考えています。この先も、地域社会が活性化できる可能性は十分にありますが、今が踏ん張りどころだと感じています。

奥泉 三鷹市にはコミュニティ活動の伝統があることを、市民が誇りに思えたいと思います。自分が暮らす地域を誇れるのは素晴らしいことです。

河村 それは地元の輪って大事ですね。先生には地域活動を復活して、触媒のような役割を果たしてほしいです。日本の文学界には損失になってしまおうので、あまり大きな声では言えませんが。

奥泉 そんなことはありません。ぜひ、また機会があればやりたいです。

河村 私は、本との出会いは一期一会だと思つているところがあって、何度も読む本はそう多くありません。だから、繰り返して読みたい先生の本は私にとって大切な宝です。今日は本当に勉強になりました。ありがとうございます。

奥泉 こちらこそ、ありがとうございます。